

# 伊藤立教師を偲んで

——「現宗研魂」との遭遇——

田 澤 元 泰

「ぼく、崇子さんと結婚するんだ。」伊藤立教師の、仏教学部のアイドルを射止めたという勝利宣言だった。卒業前にいきなり言われて、驚いた記憶がいまだに鮮明に残っている。それほど彼は一途で率直な人間だった。学部卒業後、私は立教師の誘いで仏教の勉強会に参加した。総勢六名のリーダーは提案者である立教師であった。カリキュラムからテキストの手配まで全て彼に任せきりだった。時には研修旅行と称して、ひなびた山奥の温泉を探訪し、混浴の露天風呂にて貴重な体験もさせてもらった。当時はインターネットもなく、ひたすら旅行雑誌を中心に徹底調査をしたようだ。緻密かつ大胆であった。しかも全て彼に任せていれば安心していられた。

平成十三年八月、立教師が現宗研の主任として宗務院に登院してきた時に、十年以上経った再会ではあったが自分の目を疑った。そこに映った彼の姿は全く別人のようであった。持病があるとは以前に本人から聴いていたが、病状が悪化しているように思われた。当時私は日蓮聖人立教開宗七五〇年慶讃会事務局の仕事で宗務院に勤務していたが、所管が異なることからあまり頻繁に立教師を訪ねることは控えていたが、傍目にもつらそうに見えた。平成十六年四月に小生が現宗研の所長に任命されて、図らずも彼とは上司部下の関係になってしまった。しかも彼は私にとっでは先輩格であった。就任するにあたりお互い同僚として話し合った。研究所の抱えている課題と問題点などの他、

主任の後任人事についても話し合った。率直に言つて立教師もやりにくいだろうし、私もやりにくいといったような話までした。しかし彼は「研究所の将来を思い、納得のゆく後任が決まるまで主任をしたい。」と言い切つた。緻密さ一つとっても彼とは正反対の私を上司において、さぞかしやりにくく嫌な思いも数多くしたことだろう。しかし彼は石川浩徳現宗研所長の時代から、主任として研究所を支える礎石の覚悟で頑張つたと思う。そこにはかつて若き時代、すなわち昭和五十年四月に研究員になつてから、中濃教篤、石川教張両先生から叩き込まれた、現宗研の生命線ともいえる、社会を視野に入れた布教実践の上になつた教化研究の構築、に生き甲斐を見いだしていたからだと思う。研究所の職員に介添えされながら着替えをして執務に臨む彼の姿はまさに現宗研魂そのものだった。現宗研関係者だけでなく、立正平和の会や他教団にまで及ぶ立教ファンをはじめとする知人友人などの人脈の広さは、かれの緻密さと大胆な行動力だけでなく、マドンナを射止めたあの情感あふれる人間的豊かさのなすところであつたと思う。

世寿六十一歳。まだまだ早すぎる御遷化だった。伊藤立教師に出会え、ともに活動できたことを感謝し、誇りに思う。